

「情況」一頁号(二〇〇九年)

私史という回想録は八八年までである

重信房子著日本赤軍私史を読んで

物江克男 (MONOUE Katsu 元共産主義者同盟赤重派)

ソ連崩壊後の「人民性」とは何であったのか

ある意味「無残な」本である。重信氏自身もそれを感じておられるのではないか。第一章から第二章までの、「躍動する」「生き生きとした」魅力的な文章と、第三章以下の魂の伝わってこない「死んだ」とも言える文章。あまりの落差の大きさに、戸惑いを感じてしまう。わたしには、この落差の大きさにこそ、この本の「本質」があると思える。

この本が、重信氏の救援紙への連載をベースに、書かれた経緯があるにせよ、あるいは、獄中で書かれたというハンデキャップがあるにせよ、重信氏が現在「世に問うべき」は第一章以下の闘いのより深い、「総括」なのではないだろうか。極言になるが、第二章までは、「回想録」ともいえる内

容であり、第三章以下こそ、新しく文章化されたものであり、現在の「闘い」と結びつく重要な内容であるとわたしは考えるからである。

一九八八年以降、東欧、ソ連の崩壊はパレスチナの闘いにも、日本赤軍にも決定的な環境の変化をもたらした。ソ連の存在を前提とした闘いは世界中で追い詰められていくことになった。パレスチナにおいても、PLOを中心にした勢力は後退を強いられ、停滞する状況を打破したのは、民衆の「磔」による闘い「インチファダ」であり、その後伸張するのは、民衆の福祉に根ざした宗教政党「ハマス」であった。かつて前線にいた、PFLPなどの国際共同行動路線は転換を迫られることになる。

その後、日本赤軍は、世界中で追い詰められ、ベイルートでさえ安住の地でなくなっていく。本来この時こそ、七二年以降

の総括が問われたのではないか。本格的に始まる「後退戦」のなかで、改めて、パレスチナ人民との「連帯」することは何か、それは自分たちのレバノン、パレスチナの地での生き残りを賭けた内実としても、問われたように思える。しかし本書を読む限り、七二年からの闘いの「総括」が、日本での新たな合法的民主主義的闘争の構築ということに、結論づけられたと判断せざるをえない。この内容に、少なからず「違和感」を感じてしまうのは、わたしだけでは無いはずである。この後退戦、この大きな転換のなかで、パレスチナ民衆とともに闘う道を戦略化することこそ、「パレスチナ人民のなかで」生きていくことではなかったのか。

勿論、八八年以降、国際共同行動に参加した、日本赤軍以外の他国からの人達は、それぞれの母国に帰還していったのが、現実であったことは想像に難くない。日本赤軍がかの地に残った最後のグループであったことも事実であろう。

かつての共産主義者同盟赤軍派としては、私たちの任務が「日本における社会変革」であることは、当然のことであるし、それは一度も否定したことはない。世界同時革命の現実的展開として、「成熟した資本主義国である日本」での「革命」をめざすうえで、全世界の民族解放闘争や、民族解放闘争から社会主義をめざす幾多の闘いと共同し、そこに学ぶことをめざした。しかし、「主戦場」は日本であることは「自明」のことであったはずである。そのことを、改めてもちだすことより、

困難な過程であるが、世界の中ではまだ可能性の高いパレスチナの地で、人民との共同を模索することが、リッダの精神を引き継いだうえで、「総括」そのものではなかったのか。数回の、獄中者奪還闘争を行ったことの、「責務」も、このことを要求するはずである。

和光氏が「パレスチナ人民」と本当の連帯は存在したのか、と問う、感覚的な根拠もこの近くにあるのかもしれない。

連合赤軍事件、リッダ闘争の総括の方向

わたしは、連合赤軍事件の根本的なというか、本質的な「総括」はまだできていないと思ってきた。「総括」は次の新しい運動の高揚のなかで、その新しい運動の水準によって、最終的に「総括される」ものだと、考えてきた。リッダ闘争は「連合赤軍事件」で右往左往する私たちに、何か「正しい」総括を競い合うより、「人民のために闘う」というのは、こういうことだと、自らの生命を賭けた闘いの中で示したのであり、それこそが、私たちに、躊躇せずに、「隊列を整えよ」前に進めという、強く、激しいメッセージではなかったのか。この「意志」を、あるいは「遺志」を、日本の地で、日本での闘いで、引き継ぐとはいかなる実践なのか、それを考え続けてきたつもりである。

①「武装」あるいは「軍事」という領域について、簡単に「清

算」してしまわないこと。私たちの敗北過程を「具体的」に確認し、確保し続けること。全てを、清算によって一掃しないことである。再び、大きな暴動が起きた時に、抑圧者として登場しないためにも。経験を蓄積として共有し続けること。そのことこそ軍事を「至上化」もしないし、「観念化」もしないし、「否定」もしない、リアルなものとして対象にできる可能性を残すことである。武器が「磔」であっても充分である。

②誤りを個人の自覚レベルの問題にしないこと。連合赤軍の「共産主義化論」、日本赤軍の「自己批判の主導性」。後退戦を現実的に、民衆とともに闘う時に最も必要なものではないか。問われるのは現実を現実として認識できる組織の構造ではないのか。共闘は現実認識の相違とそれを埋める信頼から生まれていく。「隊伍を整える」というのは、共に闘いうる全てのグループへの信頼感であり、それを別名「献身性」と呼ぶことである。

③「党」を至上化しないこと。「革命」が遠のけば、遠のくほど、「党形成」が課題になる。革命の現実性には直面できないが、「革命党」建設は現実性がある。皮肉っぽくいえば、「党建設」を永遠にいい続けることもできる。自分の「正しさ」の絶対化を追求し、そのために闘うことに美しさはない。

引き続き停滞と混迷のなかでこそ、生起してくる色々な違いのなかにこそ、共同の根拠をみつければ、共同を作り出していくことこそ、民衆への献身なのではないのだろうか。

充分とは言えないし、誤りを含んでいるかもしれないが、最低限、民衆とともに闘い、ともに生きる原点として、以上のことを考え続けてきた。

パレスチナ主導の限界

重信氏らの、アラブの地での、日本赤軍の闘いは、問題意識を持つ日本の若い人たちに充分魅力を感じさせるものであり、かなりの人たちが、日本赤軍との共同を求めて海を渡っていった。連合赤軍事件以降、日本の運動が後退戦に入ると、その傾向は、さらに大きくなっていった。また、日本で運動している人たちでも、日本赤軍との共同を求めていった人も多かったと思われる。パレスチナに存在しながらも、日本との諸関係は重層化していったのは、重信氏が述べている通りであろう。

また、困難な闘いを継続するなかで、信頼を獲得し、レバノンや、パレスチナあるいは、幾つかのアラブの国と国家の運営レベルでの動きに携わる事態もあつたはずである。あるいは、パレスチナやレバノンのキャンプで生活した仲間が、母国の革命の成功のなかで、国家の中核メンバーとして、帰還していく例にも遭遇してきたと思う。

パレスチナの地から、日本の旧友たち、あるいは、「新左翼」の運動を観察すると、そのあり方の「狭さ」が見えてきたのも事実であろう。何故、合法性を徹底的に利用しないのか、こん

なに若い人たちが問題意識をもっているのに、昔ながらの形態にしがみついているのか。時には、今までの新左翼型の民衆運動と異なる形態を追求し、構築しなければ、日本での展望は切り開かれないと考えたのではないか。

この思いは日本赤軍を軸とする、日本の運動再編成の志向となった。この志向性こそ「人民革命党」の創設と、日本赤軍の「人民革命党」への移行の決断過程であると思われる。重信氏はパレスチナの地での闘いで獲得した「水準」を日本の運動に「適用」することで、日本に自らのヘゲモニーによる組織と運動を作ろうとしたようである。

この過程が進行する時期は、同時に、並行して日本赤軍がパレスチナ、レバノンで後退戦を強いられ、かつ世界中で日本赤軍がその存在の安全性を奪われる状況であり、二重の過程が実は同一の事態として進化したのであった。

パレスチナからみえる日本の状況も、私から見れば、日本の闘いの一部の現実であり、この一部であることを、自覚しつつ日本人たちに呼び掛けていくことこそ、パレスチナで学んだ「団結」ではなかったのか。あくまで、人民の闘いの拡大のためには「自ら」を相対化できること、「団結を求め、団結を基礎にし」、信頼を醸成するということは、徹底した自らの相対化の認識なしにはあり得ないはずである。

さらに、その上に、重信氏自身が日本において指導すること、この組織が拡大すると彼女自身が判断したとしたら、それ

は、日本赤軍の改組組織である人民革命党は日本赤軍の解散宣言とともに公然化されることなく解散したとなっている。しかし、この本を読めば読むほどそうは思えなくなる。軍事組織としての日本赤軍から合法組織としての人民革命党に改組した。

このとき公然化されていなくても、事実上日本赤軍は解散し、人民革命党へ移行したことになる。しかし、まだ、日本赤軍として活動の続行を望んだ人がいる可能性はある。しかし、組織としては、日本赤軍は解散を確認しており、合法闘争組織への転換をした。重信氏は逮捕後この日本赤軍の解散を、「組織」を代表して宣言したことになる。そして、合法闘争への転換を明らかにした。しかし、既に解散を決めている日本赤軍の解散宣言が、その改組組織であるとはいえ、人民革命党の解散と別個であることは、少しでも組織活動を経験してきた者にとって自明のことである。重信氏が敢えて、牽強付会的に人民革命党の解散にこだわるのは理解に苦しむところである。

事実として、重信氏の逮捕後「人民革命党」なるものが、活動実態を喪失したとしてもそれは別のことである。事柄の全てが、重信氏の頭のなかで展開されているのではないかと、疑問に感じてしまうのは、わたしだけであろうか。極言すれば、もし、人民革命党の存在が、公然化する必要のない事実であったとしたら、それは、公然化しなくてもよいはずである。そのようなことの全てが、「私史」として、躊躇することなく、語られることにわたしは、強い違和感をもってしまふ。重信氏の人

は明らかに「私党」である。連合赤軍の総括から始まり、リッダ闘争から、パレスチナの地での日本赤軍の闘いの総括、幾多の闘いを経ての最終地平が、もしこの結果だとしたら、それはあまりにも寂しいといふ言いがたい。

パレスチナからみた日本の闘いの状況への視点には勿論新しい新鮮な側面があったと思う。しかし、それも一部である。八八年以降の困難な状況は日本でも同様であり、日本の権力の弾圧の厳しさも増していた。「マヌーバー」的に市民を組織しても、それが弾圧に耐えうるものでなかったことは、それこそ重信氏の逮捕以降の事実が示している。強い意志を持ちながら、自らの徹底した相対化をすることで、市民とようやく共闘できるのである。

その時は自らの出自も決して隠すこともなく、信頼を作り出していけるのでは、と思う。そのような信頼の在り方こそ、パレスチナの闘いは創り出してきたはずである。

「人民革命党」とは何だったのか

「人民革命党」ほど解かりにくい存在はない。何か秘密めいている。そして、「まだメンバーは残っているのかな」と多く人は疑問視している。かつて「日本赤軍」として活動歴のある人たちはどうなのかな、とか。そして、この間の和光氏らの「日本赤軍は一枚岩ではなかった」旨の発言である。この本で

生と、人民とともに闘う組織の歴史はどこまでも別個である。重信氏にとっては、逮捕時までの全てが、過去形として語られる「回想」の領域になってしまっているのでは、と危惧してしまふ。

仮に、八八年までの歴史は「回想録」として、収斂させられていくとしても、東欧、ソ連崩壊後の闘いは現在に続き、現在を規定する内容である。

私は、重信氏を中心メンバーとする、日本赤軍と共同の関係をもちながら、日本での運動に参加してきた。日本の運動と、パレスチナの闘いと、「共和国」での活動が連携できることを希望する「赤軍派当初」の構造にこだわりながら、それぞれの体験と蓄積を共有し、それを、日本の闘いの共同性、現実性のなかに生かしていければいいし、それが任務と考えてきた。しかし、八八年以降の世界的変化はいずれの領域における闘いにも決定的な変更をもたらした。改めて、人民とともに闘うことの内実が問われることになったと認識している。

連合赤軍事件以降続けてきたいろいろある「総括的検討」も、リッダ闘争以降の闘いのなかで学んだ事実も、そして「共和国」での体験も、日本の地で「人民とともに闘う」ということの可能性を見つげるために少しでも役立てばよいのではないかと。そのように考えてこの三〇余年、行動してきた。実際は、一度、根拠をもってしまふと、それぞれは、独自の方向を持つ。日本に残った私たちも不十分な闘いしかできてこなかった。

た。その事実を、前提にして、かつ困難な、現在の状況のなかで、いかなる連携が可能なのか、今後も模索していくしかない。

重信氏には、改めて、本書における第一三章以降について、魂を込めて論述してほしいと思う。そのことを可能にするのは、やはり、これからの日本の運動の水準であり、拡大である。そのことを通して「対話」が発生し、新たな視点が彼女に誕生するはずである。

この本の副題は「パレスチナとともに」である。しかし、第一三章以下は「日本人とともに」とされるべきである。いや、そのような副題をもつ重信氏の文書を将来期待していきたい。まだ、「回想する」のは早すぎる。